

の長春では“シャーマン文化討論会”が開かれ、同じく1988年の7月、内蒙古^{ハイラル}海拉尔市では“アルタイ語系諸民族の叙事文学とシャーマニズム”を中心テーマとした全国的学術会議が挙行された。シャーマニズムの実施調査も盛んに行われ、満族シャーマンだけでも老シャーマン50数人、新シャーマン50数人ぐらいがみつかった。シャーマンの神歌、神話、伝説などが山ほど収集されている。こうした豊富な資料によって書かれたシャーマニズムの本も次々に出版されている。その中、私の知っている限りでは『シャーマン教文化研究』（第1輯、吉林人民出版社、1988年）、『シャーマン教と東北民族』（吉林教育出版社、1990年3月、刻小萌、定宜庄著）、『叙事文学とシャーマン教』（内蒙古大学出版社、1990年、^{リンチンドルジ}仁欽道尔吉、郎櫻編）などの例をあげることができよう。張紫農教授と烏丙安教授の本も中華本土における“文化熱”と“シャーマニズム熱”を背景に出版されたものである。

竹田旦著

『祖霊祭祀と死霊結婚』 — 日韓比較民俗学の試み —

徳丸亞木*

本書は、『「家」をめぐる民俗研究』（1960年）を筆頭として、厚い研究実績を持つ著者が、本書の表題に冠したごとく、「比較民俗学」的視角で、新たに「家」をめぐる祖先祭祀の問題を論じた論文集である。

『序 祖先祭祀の民俗学』において、著者は、柳田民俗学における、「家」永続の原点、現実の「家族」と理念的な「家」とを結ぶ接点としての祖先祭祀の理解を評価する。しかし同時に、そこに見られる「家」制度の基礎を形成する長男子（嫡子）中心の観念による研究の呪縛を指摘し、この呪縛からの開放の糸口として、分牌祭祀（祖先祭祀権

*筑波大学大学院歴史・人類学研究科

の本・分家各々への複系的継承）、複檀家（家族成員の、異なる檀那寺への分属）、位牌分け（死者の複数の位牌の縁者への分散・多義的配布）の習俗を取り上げ、これらの習俗に非「男子中心」、非「長子中心」、本家・分家・婚家間の祭祀実修・継承権の対等性を指摘する。

こうした、従来の「家」通念から外れた習俗を研究の視野に納める姿勢を、著者は「複眼的」と表現する。そして、この「複眼的」研究の一例として、日本と類似した「家」通念（父系、長男子・一子残留直系家族、家永続願望、祖先祭祀の長子独占）を持つと理解されてきた、韓民族の類似習俗との対比、言わば「比較民俗学」的視角の必要性が主張される。

著者の韓民族の民俗文化の本格的研究は1973年の、和歌森太郎氏、任東権氏を中心とした、日韓共同民俗調査団の韓国調査に始まる。著者は、従来ややもすると日本固有のものとして、日本国内で自己完結的に祖型追求がなされてきた民俗事象が、韓国にも「より古風をおびて」存在していることを知り、「ともかくも比べてみずに日本固有とか伝統的とか断定してはならないということ、海外を含めた比較の重要性を痛感した次第である」と、「比較民俗学」的発想の萌芽を語る。

しかし、著者の言う「比較民俗学」とは、海外との比較による日本本土の民俗文化の祖型追求に目的を置いたものではない。例えば3『位牌祭祀と祖霊観—沖繩諸島』では、沖繩諸島の位牌祭祀と祖霊観の考察には、位牌や墓地をめぐる祭祀習俗、祭祀継承・相続をめぐる四つの禁忌を含む特有の祖先観の追求が重要であることを述べ、この何れもが日本本土には見出しにくい習俗と指摘する。つまり柳田、折口流の「日本古代の鏡」としての沖繩文化理解ではなく、むしろ日本本土との異質性に着目する必要をも認め、日本文化の外に立って日本を望む姿勢、言い換えるならば、日本の民俗文化の相対化の必要性を説く。

筆者の、この沖繩に対する姿勢は、韓民族の民俗文化に対しても共通するものである。長い間、別々の歴史を歩み、文化を異にしてきた、そして

民俗の伝承基盤も異なる民族間の、社会生活や精神生活の根幹を成す、社会伝承・心意伝承の比較研究の意義を筆者は常に内省してきたと言う。

さて、本書で著者が、その「比較民俗学」的研究の指標として提示したのが、「分牌祭祀・分割祭祀」と「死霊結婚」である。

『1 分牌祭祀の民俗—茨城県勝田市』では、勝田市佐和地区の分牌祭祀慣行が詳細に解説される。著者は農村経済下での隠居分家が、分牌祭祀を導いたとし、財産分与による経済基盤の確立、いわば「家」としての自立の重要性が、分牌祭祀という祖先祭祀実修の責任と結びついていることを指摘する。さらに、生業基盤への相続財産の影響が僅少な、自営業・給与所得者などでは分牌祭祀が行われず、祖先祭祀の経費の諸子間分担が行われる例を取り上げ、都市化という過渡的時代相の中での分牌祭祀慣行の変質を捉えようと試みている。

『2 祖先祭祀の分割—韓国济州島・珍島』では、韓国の男系主義、宗家主義、男性主義の儒教式祖先祭祀の理念型に背反した、分割祭祀慣行を济州島・珍島での著者の調査資料をもとに分析する。四代祖までの各位の内、少なくとも一位以上について、宗家が支系の者に、その忌祭、茶礼の先祖祭を移譲、分割して奉祀する分割祭祀慣行の実態を解説し、济州島では、その慣行が、親子二世代夫婦の同じ屋敷内での内棟と外棟での複世帯居住、不動産の諸男子均分相続に関連している事を述べ、济州島の分割祭祀が、形態上、十七世紀中葉までの両班層の子女均分財産相続、長子・子女輪回奉祀と対比し得る可能性を指摘する。

続いて著者は、日本の分牌祭祀と、韓国（特に济州島）の分割祭祀が、いずれも家の複世帯制、男子均分相続に関わる点を強調し、家族構造からの両者の比較研究の必要性を説く。

ここで注意されるのが、珍島の事例解説において、分割祭祀が「無縁仏」的存在となった傍系親などの積極的祭祀といった、言わば主催者の心意に関連している可能性が指摘され、家族制度、親族構造と心意伝承との関連で、対象を読み解こう

とする著者の姿勢が示されている点である。この姿勢にもとづく具体的なアプローチは死霊結婚に関する論考により明確に示される。

『4 韓国人の他界観』は韓民族の死霊結婚を背後から支える、心意・他界観についての論究である。著者はここで、悪霊化しやすい独身者の死霊を儀礼的に結婚させ、「巫祭」によって慰撫することにより、他界へと導く事を可能にする死霊結婚が、韓民族の根底的な信仰観念に関わっている事を指摘する。

『5 死霊結婚の比較民俗学—中国・日本・韓国』では中国華北、華南、台湾の「冥婚」、济州島を始めとする韓国の五地域の死霊結婚、沖縄の「後生の婚礼」と山形県の「ムサカリ絵馬」を事例として死霊結婚の比較研究を行う。著者がここで用いた方法は基本的には類型論である。著者は死霊結婚を、その目的から慰霊・解冤型、祖霊昇格型、入養、立嗣型に、新婚者両名の関係から有縁者型と無縁者型とに、儀礼内容から遺骨重視型と位牌重視型とに、儀礼執行者からシャーマン関与型と非関与型とに類型化し、各類型の展開状況を提示し、その前後関係を類推する。

この類型化は、死霊結婚を、主催者の心意的側面、儀礼形態、家族制度上の意義といった多義的な視点から捉えようとするもので、言わば死霊結婚と言う事象にまつわる、心意伝承・儀礼伝承を、要素として類型化し、各地域における死霊結婚の実相の相対化をはかったものである。そして、各要素の接合形態から「慰霊・解冤の目的が乏しくして入養・立嗣が強く意識され、骨重視の儀礼が発達していて、ほとんどシャーマンに関与させないといった諸特長」を有した「济州型」、或いはその反対の性格を持つ「陸地型」といった、言わば死霊祭祀を指標とした「地域」区分が導き出される。

『6 珍島の死霊結婚—全羅南道珍島』に於いてもこの視点は明確で、ここでは筆者は珍島の死霊結婚を济州島（济州型）と陸地部（陸地型）の中間型としてとらえ、「このような珍島の位置・役割を指してこそ筆者は民俗の地域性と理解し、

珍島の死霊結婚に対する「系統論」(文化複合)的理解の可能性が提示される。

このように本書は、日韓両民族の民俗文化総体の民俗誌的記述を希求するものではない。むしろ、各々の民俗文化において、「分牌・分割祭祀」、「死霊結婚」といった特定の指標に収斂する社会・心意伝承を鍵として、祖先祭祀の論理を解説し、他民俗の、あるいは他「地域」の民俗文化との相対化の下で、日本の「家」と祖先祭祀をめぐる新たな研究視角を、再提示しようとする試みと言える。

評者としては、死霊結婚に関して、著者が提示した要素分類と類型化によるアプローチの他に、伝承者の生活誌・家族誌的側面からのアプローチ(他国の調査においては困難な手法であろうが)も可能ではないかと感じるが、本書の各論考は、「日韓比較民俗学の試み」と副題に示されたごとく、筆者の「比較民俗学」の実践の過程に紡ぎだされた、後学のための道標としての性格を帯びたものと理解するべきであろう。

その意味で、蛇足ではあるが、評者が特に興味

を覚えた点を簡略に触れておく。著者は『3位牌祭祀と祖霊観—沖縄諸島』において沖縄諸島の位牌祭祀と屋敷継承との関連を指摘している。沖縄諸島の祖先祭祀における、「屋敷筋」との関わりは、馬淵東一氏、村武精一氏、牛島巖氏など先学たちが示すごとく、沖縄文化における「家」理解に深く関わる問題であると評者は理解する。しかし、この問題は村武氏の指摘するごとく、むしろ本土の屋敷神祭祀、あるいは伊藤唯真氏が報告した屋敷先祖との比較を通して、日本文化における祖先祭祀の問題に接合できる可能性を秘めている。穿ちすぎたかもしれないが、著者は、韓半島の基主と呼ばれる屋敷神祭祀との比較を通して、「家」と「屋敷」と言う対偶の指標で、韓半島、沖縄諸島、日本本土の祖先祭祀を相対化し、社会伝承と心意伝承の接合の下で論じ得る可能性を暗示しているのではないだろうか。著者の考えをぜひとも知りたいところである。

(1990年9月 人文書院)

新刊紹介

『韓国民俗学』vol. 23 (学会創立20周年記念特輯)

特輯号として編まれた『韓国民俗学』23号は、昨今の韓国民俗学の状況やこれから何を指そうとしているのかがかなり鮮明に現れている。したがって数編の論文以外にも、「亜細亜国際民俗学大会発表要旨」や「韓国民俗学20年の反省と課題」等は韓国民俗学内部からの肉声としてこれからの韓国民俗学に付きまとう内容になるだろう。

なかでも昨年韓国で開かれた「亜細亜国際民俗学大会」における発表要旨をみると、任東権「韓国民俗学と亜細亜民俗」(基調講演)／烏丙安「中国北方諸民族の民間信仰」／張紫晨「中国民俗学の歩んだ70年」／金錦子「在中朝鮮族の生活と文化」／直江広治「樹木崇拜信仰の民俗」／竹田旦「東アジアにおける死霊結婚」／永留久恵「対馬からみた日本の神々とその源流」

／玄容駿「巫俗神話の社会的機能」／池春相「禁域標識考」／成炳礼「ユッノリの比較民俗的考察」とあるように、近隣諸国の民俗との比較が強く唱えられていて、比較民俗学への関心が広がりつつあるのが分かって来る。とくに「韓国民俗学と亜細亜民俗」のなかで任東権は、「人間の思考と生活によって生成と伝承を繰り返す民俗は、一民族や国民の限界を越えてからむしろ問題が解決される場合がある。ここでまず要請されるのは、民族や歴史の交流の上で拘わっていた近隣民族との比較民俗学であり、したがって我々にとっては、中国、蒙古、シベリア、日本、東南アジアが関心の的になっているのである。」と指摘しつつ、「環黄海文化圏」に興味を示している。(片 茂永)

A 5判 356頁 韓国民俗学会 1990. 9月刊